

タイランド再発見！スベシャルツアー

タイが誇る世界遺産スコータイ 地元にごだわる青年の3つのホテル

タイにある5つの世界遺産の1つスコータイ。知名度が高く、遺跡群としてはアユタヤ以上の規模を誇り、アクセスも悪くないのだが、どうも日本ではあまり目立つ存在にはなっていないようだ。日本と比べるとスコータイは京都で、チェンマイが奈良に相当する歴史と文化を持っているのだが、日本人ツーリストは圧倒的にチェンマイが多く、スコータイに少ないのは何故なのだろうか。

かつてスコータイには安宿がなく、多くのツーリストはピサヌロークに宿泊し、バスで片道1時間半のドライブが必要だった時代もあったが、今ではスコータイ遺跡周辺や新市街にモダンで洒落たブティックホテルからデラックスなホテルまで、十分な選択肢が揃っている。

この大きな変化をもたらしたのは、ホスピ



いかにもスコータイらしいスコータイ空港



アーナンダに併設されているスワンカロク博物館



「アーナンダ・ミュージアム・ギャラリー・ホテル」のロビーに入るアンティークな扉。ミュージアムを名乗るだけのことはある

タリティービジネスには全く経験のない1人の青年ウィット君である。スコータイ出身の彼は、バンコクのタマサート大学を出て会計士の仕事に就いたが、チェンマイの「タマリンド・ヴィレッジ・リゾート」の北部伝統デザインに魅了され、自分でホテルビジネスを始めようと決断した。そして2003年、まともなホテルが無かった地元スコータイに、最初にオープンさせたのが「アーナンダ・ミュージアム・ギャラリー・ホテル」33室である。新市街の外れのショッピン

グモールを買い取りホテルに改装したというが、ミュージアムという名の通り、私設としては立派で十分なコレクションの美術館を併設し、ホテル棟でもスコータイアートを強調している。業界素人の彼が最初に手掛けたとはいえ、客室はアンティークさを見せつつ今どきのお洒落なデザイン、若さが持つ情熱が感じられて微笑ましくも思う。

その僅か1年後、スコータイ歴史公園の入り口に本格的な高級ブティックホテル「タラブリ・リゾート」20室をオープンさせる。全室がそれぞれ違うコンテンポラリーデザインの客室棟と、伝統的なチーク材の住居を再現した客室棟に分かれ、彼のユニークさを一層引き立てている。このホテルを体験するだけでもスコータイに来る価値はある。

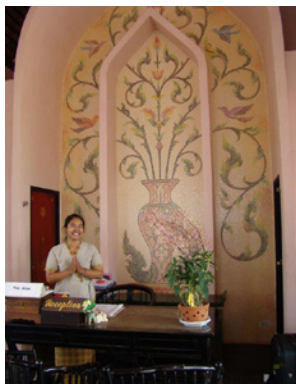
2010年にはスコータイ初の本格的なデラックスホテル「スコータイ・トレジャーリゾート&スパ」78室をオープン。かつてのスコータイ王国が稲作で富み栄えたことに因んで、敢えて周囲に田んぼが広がる立地を選んだ。スコータイコンセプトを強調したホテルで、ピサヌロークも含めてこのエリアでは一番デラックスなホテルだろう。2011年末、日本のTV旅番組でも高い評価で紹介されている。

この十数年、ウィット氏（今は君とは呼べない）の怒涛の進撃であるが、当然苦労はつきまとう。会計のプロだった彼にとつての問題はマーケティングとオペレーション。アーナンダをオープンさせた当初はほとんど客が来なかった。客室の電気を点けて満室を装う苦肉の策を講じながら、徐々に客を増やしていった。トレジャーの場合、当初は客を満足させるオペレーションが出来ず、クレームの嵐で随分と苦労している。

タイの若者はベンチャー意欲が旺盛で、あらゆる業種に進出している。ホテルもその一つで、タイには実に多くの小さなホテルが誕生してきている。その中でも、ウィット氏は地元にごだわりホテルビジネスを成功させてきたお手本のような成功例。今年で彼は40歳になるはずだ。もう、町の名士と呼ばれているのではないだろうか。



タラブリの客室は全てデザインが異なる



「タラブリ・リゾート」のレセプション

どはしつくる

1952年生まれ。サンヨーインターナショナル代表、海外の独立系ホテルの日本でのマーケティングを行っている。特にタイとは30年以上の関わりがあり、タイのツーリズム、ホテルマーケティング、SPAには強いこだわりを持っている。サンヨーインターナショナル
<http://www.hotelmarketing.jp.com/>